

大雪山の火山活動解説資料（令和3年7月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図1-①、図2～8）

監視カメラによる観測では、旭岳地獄谷爆裂火口の噴気の高さは火口上200m以下で、噴気活動は低調な状態です。

26日から28日にかけて現地調査を実施しました。旭岳地獄谷爆裂火口では、前回の観測（2019年8月）と比べて噴気活動の状況に大きな変化はみられず、多くの噴気孔で噴気温度が100℃以上（I-8は200℃以上）の高温な状態が継続していました。

・ 地震及び微動の発生状況（図1-②、図9）

4日に振幅の小さな地震が一時的にまとまって発生しました。震源は地獄谷爆裂火口付近の浅部と推定されます。それ以外の期間の地震回数は少なく低調な状態です。

火山性微動は観測されていません。

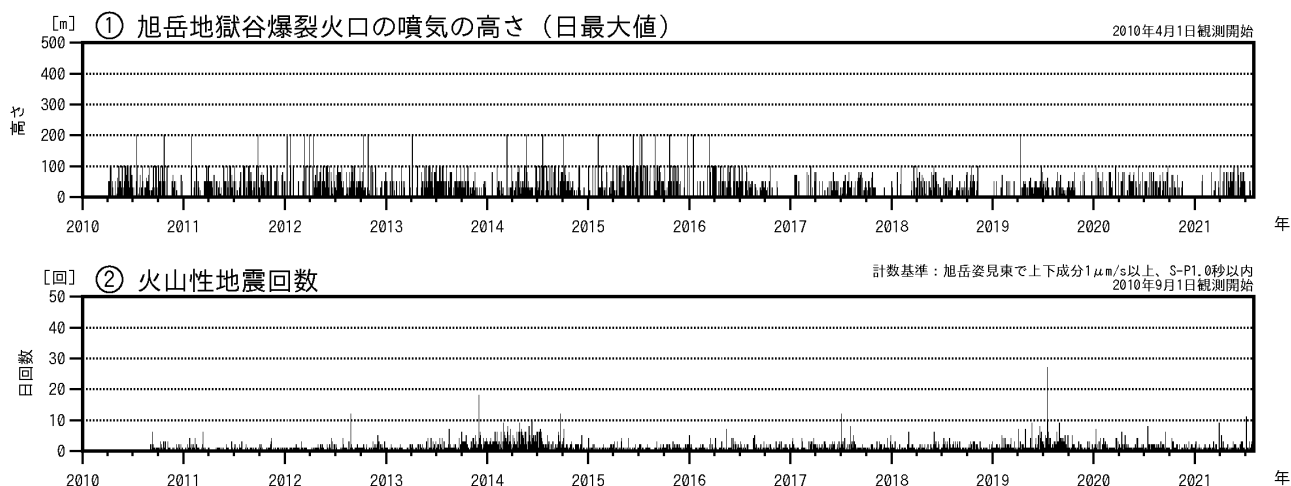


図1 大雪山 火山活動経過図（2010年4月～2021年7月）

この火山活動解説資料は気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和3年8月分）は令和3年9月8日に発表する予定です。

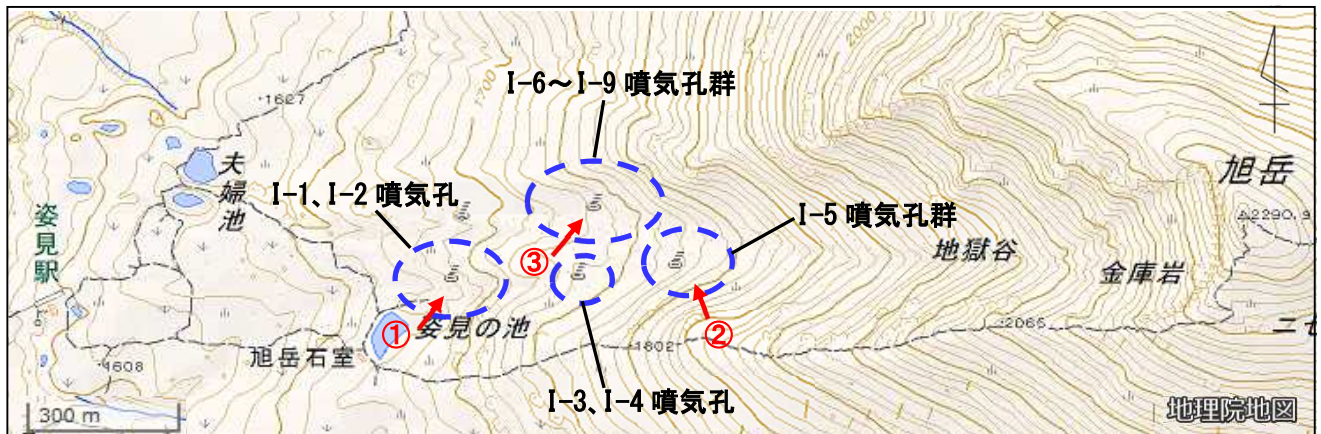


図2 大雪山 旭岳地獄谷爆裂火口内の噴気孔の位置（破線囲み）および写真の撮影方向（矢印）

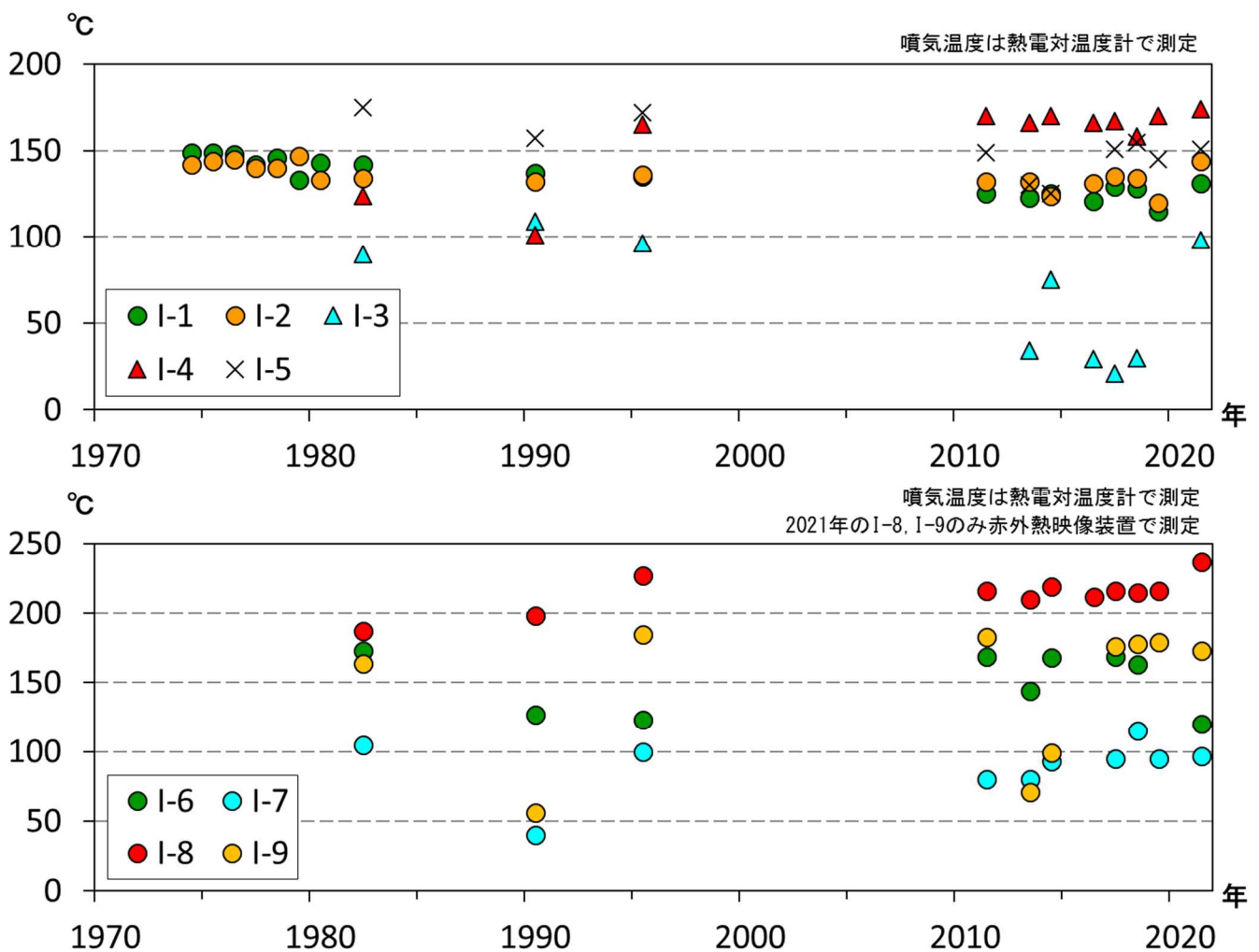


図3 大雪山 各噴気孔における噴気温度の推移（上段：I-1～I-5 下段：I-6～I-9）

各噴気孔の位置は図2を参照してください。

赤外熱映像装置で測定した噴気温度は、実際の噴気温度より低くなる可能性があります。

・前回の観測（2019年8月）と比べて、複数の噴気孔で温度上昇が認められました。

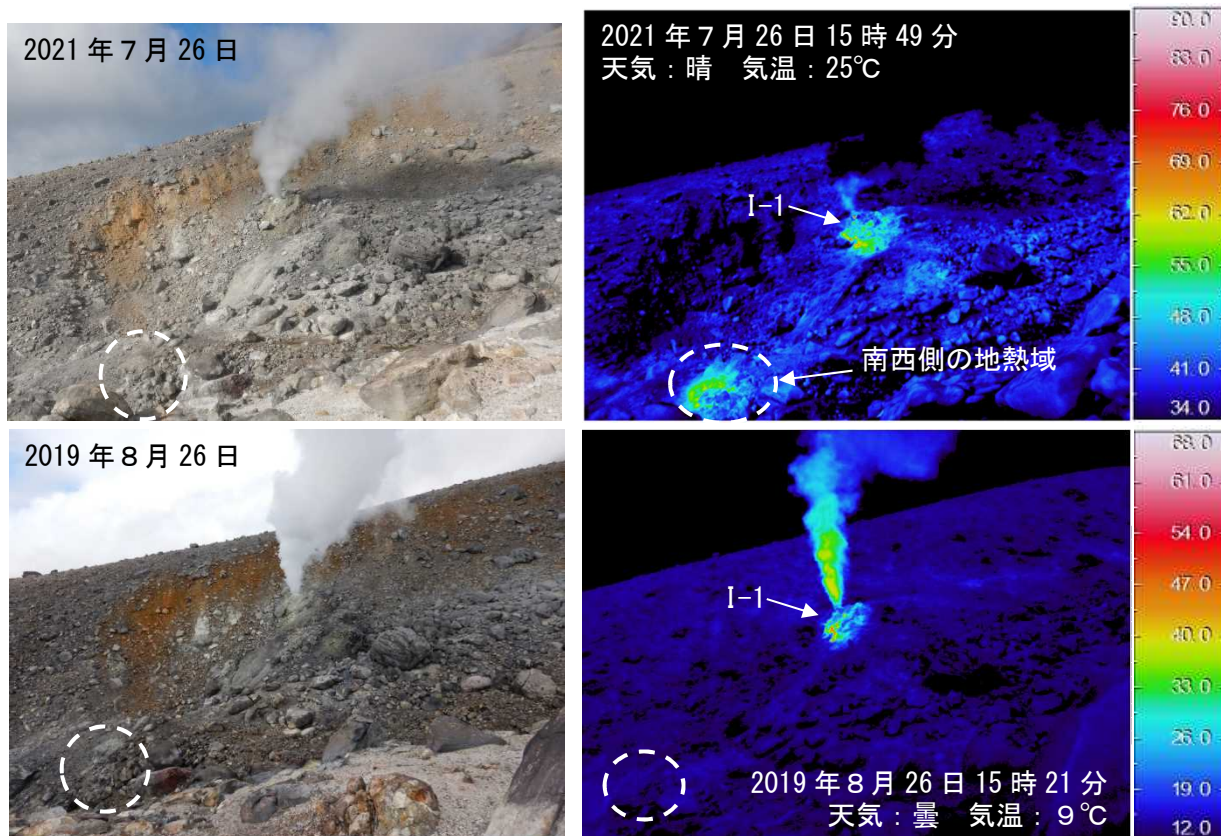


図4 大雪山 赤外熱映像装置によるI-1噴気孔の地表面温度分布 南西側（図2の①）から撮影
 ・前回の観測（2019年8月）と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。なお、I-1噴気孔の南西側に前回みられなかった地熱域（白破線内、1m程度の拡がり）を確認しました。

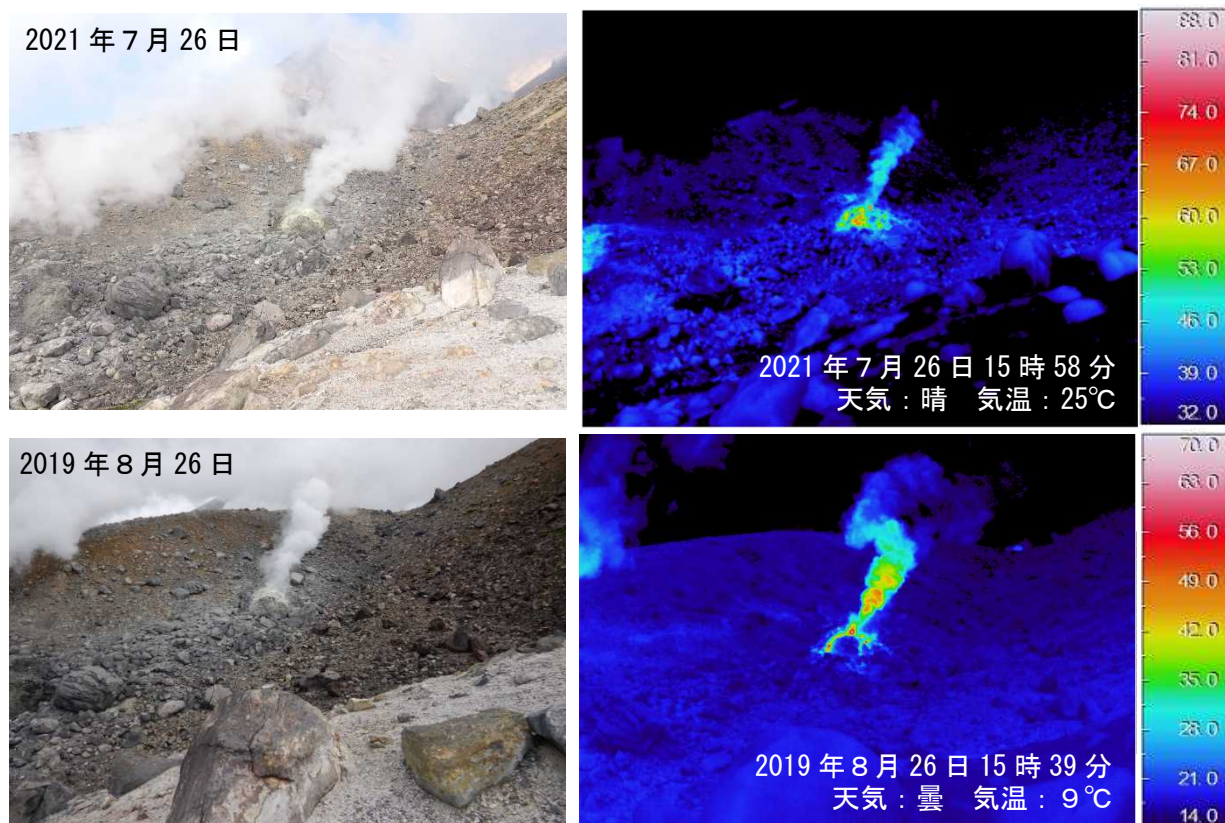


図5 大雪山 赤外熱映像装置によるI-2噴気孔の地表面温度分布 南西側（図2の①）から撮影
 ・前回の観測（2019年8月）と比べて、噴気の勢いや地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

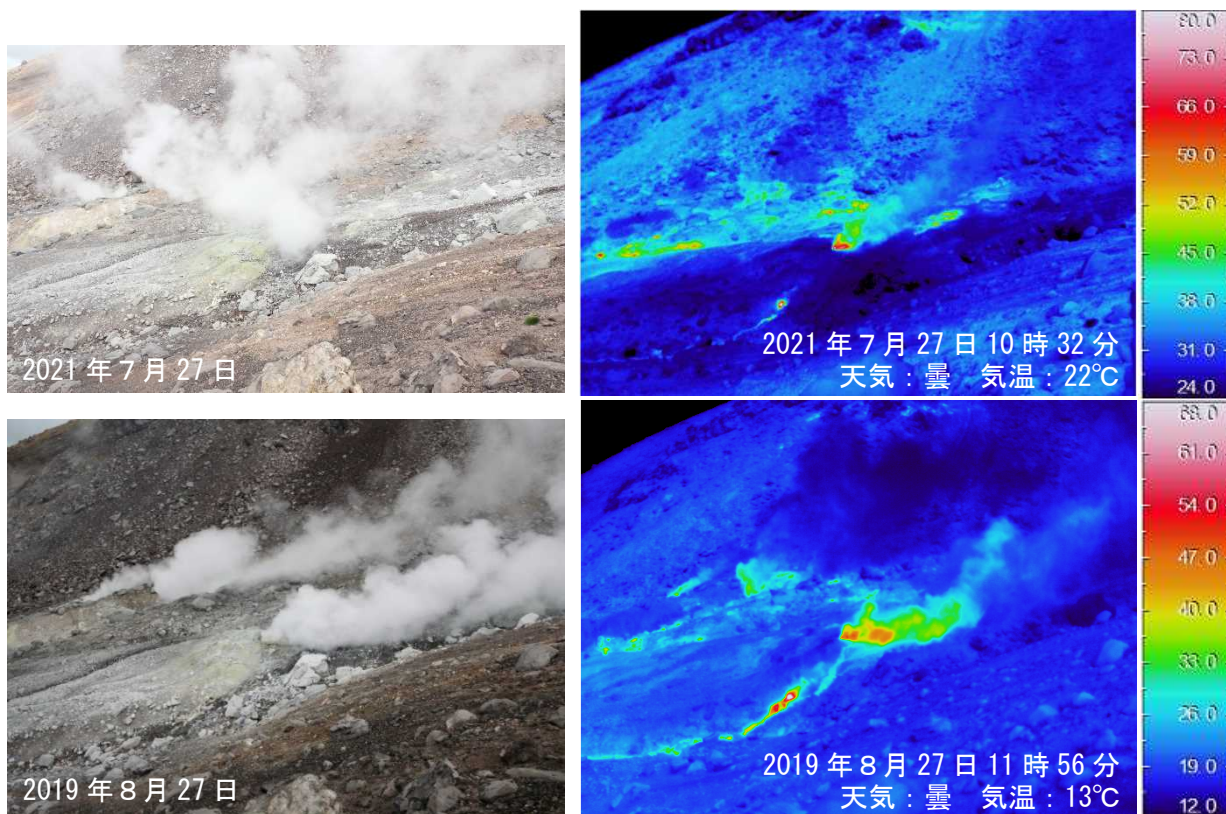


図6 大雪山 赤外熱映像装置によるI-5噴気孔群の地表面温度分布 南側(図2の②)から撮影
 ・前回の観測(2019年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。噴気や日射の影響で地表面温度分布の見え方に違いがありますが、前回の観測(2019年8月)と比べて特段の変化は認められませんでした。

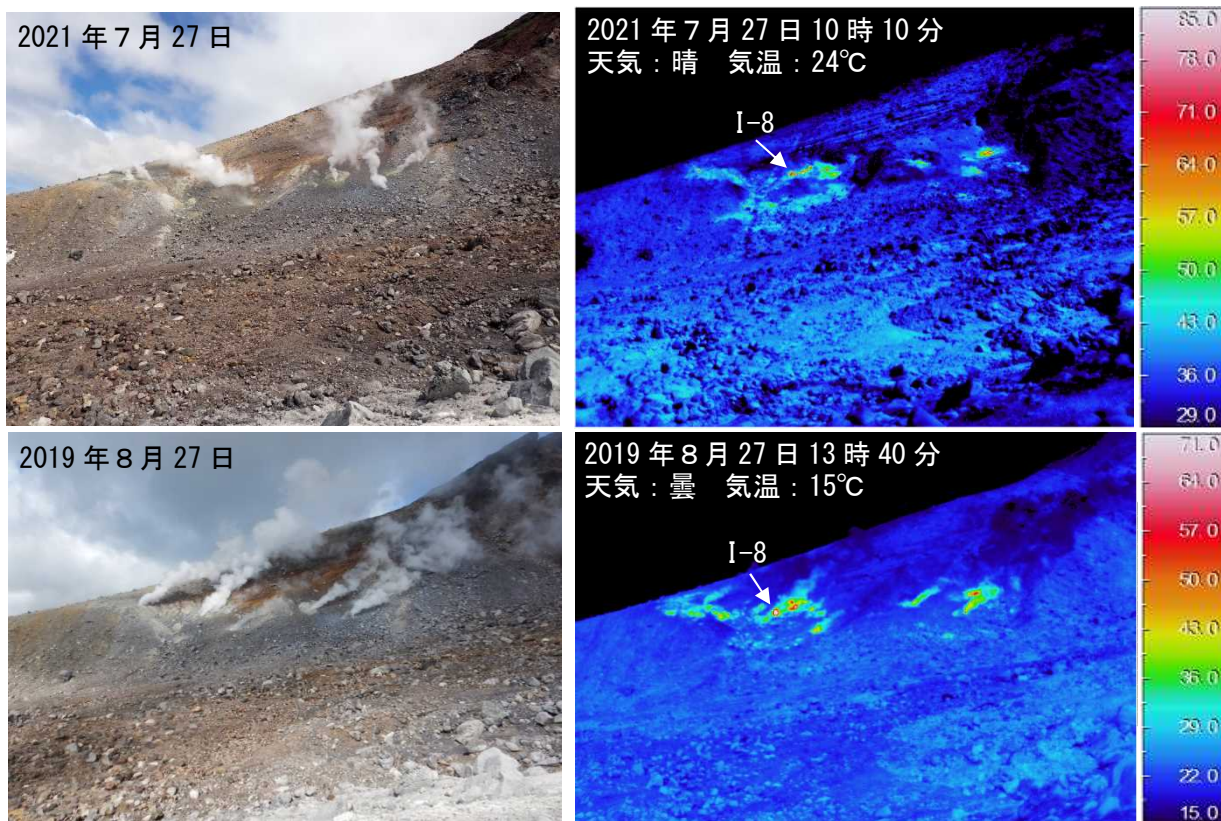


図7 大雪山 赤外熱映像装置によるI-6~9噴気孔群の地表面温度分布 南西側(図2の③)から撮影
 ・前回の観測(2019年8月)と比べて、噴気の勢いに特段の変化は認められませんでした。噴気や日射の影響で地表面温度分布の見え方に違いがありますが、前回の観測(2019年8月)と比べて特段の変化は認められませんでした。



図8 大雪山 西側から見た旭岳の状況（忠別湖東監視カメラによる）
ちゅうべつ こひがし

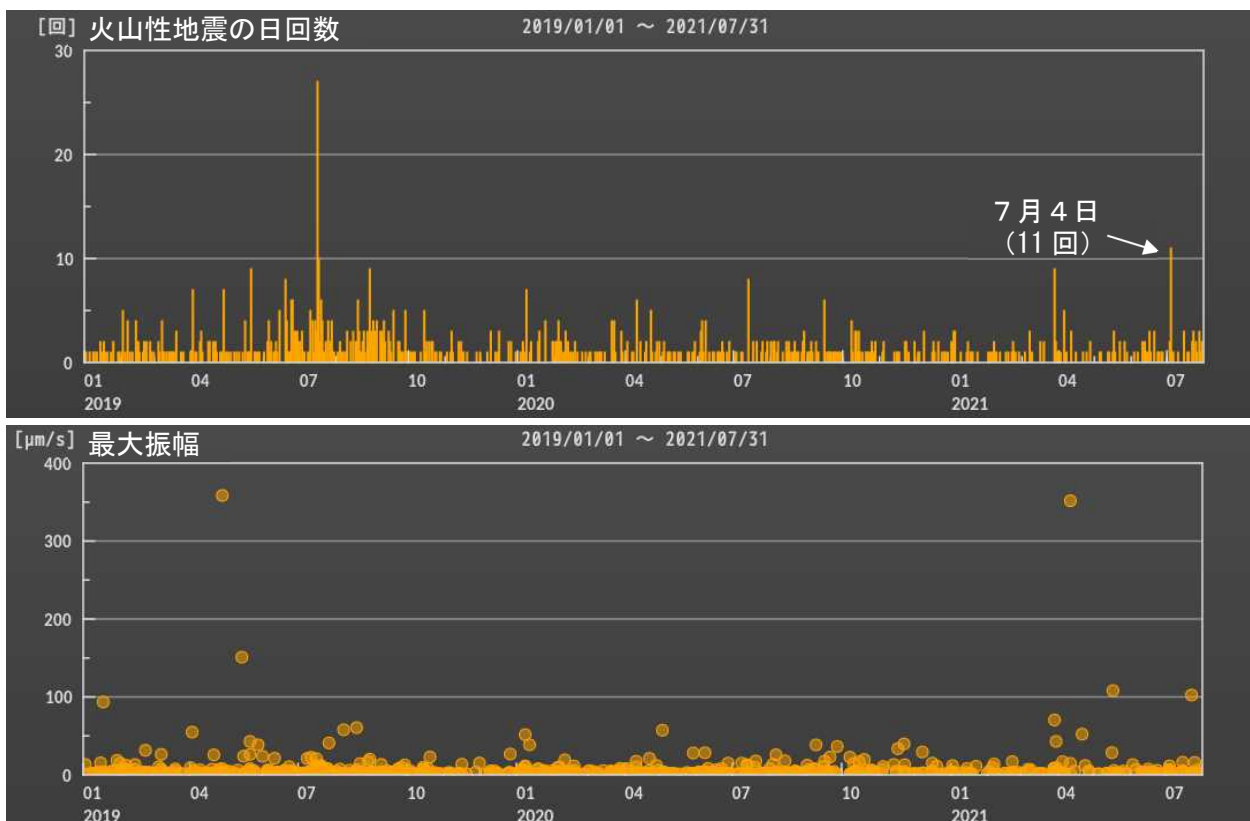


図9 大雪山 火山性地震の日回数及び最大振幅（2019年1月～2021年7月）

上段：火山性地震の日回数

下段：旭岳姿見東観測点（速度上下成分）の最大振幅

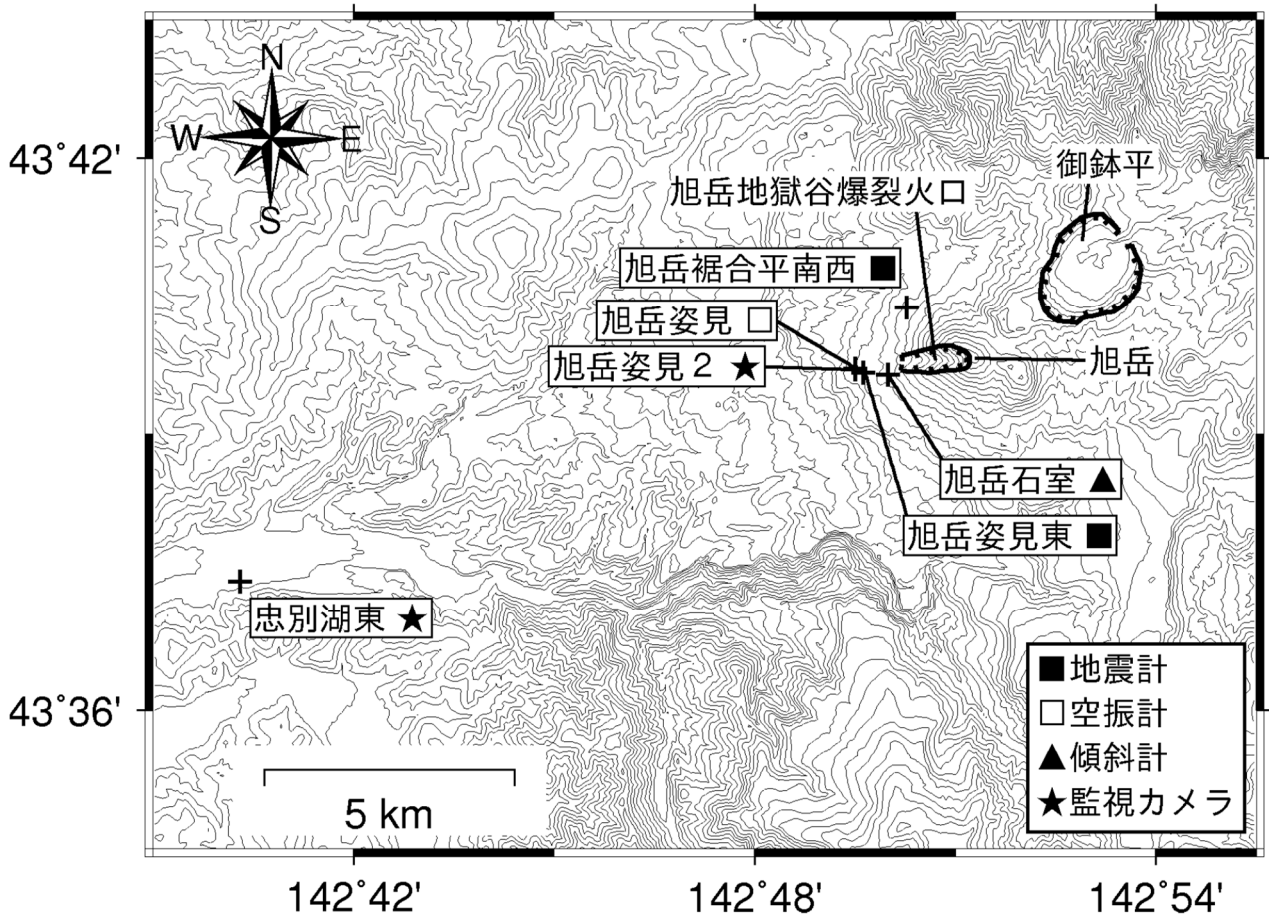


図10 大雪山 観測点配置図

+印は観測点の位置を示します。